

学校図書館の「場」としての役割

The role of school libraries as the “space”

学籍番号：201521618

氏名：佐藤 優

Yu SATO

今日、学校図書館には「心の居場所」、「放課後の子どもたちの居場所」等の「場」としての役割への期待が高まってきている。そこで本研究では、「場」としての学校図書館の現状と課題を明らかにし、学校図書館の「場」としての役割を考察することを目的とした。研究方法は、文献調査と聞き取り調査の2つである。文献調査では、「場」を何らかの目的を持って運営され利用者に作用する空間にとらえ、様々な「場」の作用と学校図書館に要請されている役割との関わりを考察した。こうした、「場」の作用を分析する枠組みとして、近年公共図書館でも注目されている社会学者オールデンバーグの「第三の場」を適用することとした。聞き取り調査では、関東の私立中高一貫校3校の、学校図書館担当者・学校図書館担当者が選出した学校図書館の常連生徒3~5名に「第三の場」としての学校図書館の現状について半構造化のグループ・インタビューを行った。

聞き取り調査の結果から、学校図書館は(1)既知の生徒同士・生徒と教職員の交流の場となっており、多様な人と話すことができること、(2)会話のマナーが守られていること、(3)学校図書館が元気を取り戻せる場所として認識されていること、(4)学校図書館担当者の人柄・飾りつけや展示・静かな雰囲気などによって常連生徒から居心地のよい・楽しい場所と認識されていること、の4つの点が明らかになった。これらの点から、学校図書館は「第三の場」になることに適していると考えられる。一方、学校図書館の「第三の場」としての現状の課題は、(1)学校図書館は既知の生徒同士・生徒と教職員の交流の場となっているが、新しい人間関係は生まれにくいこと、(2)放課後の生徒の居場所として、より遅くまでの開館が求められていること、の2点が明らかになった。しかし、これらの点は、利用者全体を巻き込んだイベントの実施、ボランティアの活用による開館時間の延長などで解決できると考える。したがって、いくつかの課題があるものの、学校図書館は「第三の場」としての特徴をおおむね満たすことが可能と考える。

これらの調査結果から、「第三の場」の特徴を生かして学校図書館を運営し、児童生徒の「社交の場」、「心の居場所」、「放課後の居場所」を提供する役割を果たすべきであると考察した。

研究指導教員：松本 浩一

副研究指導教員：小泉 公乃